日本選手として初めて米大リーグでプレーした元ジャイアンツ投手の村上雅則（マッシー村上）さんらのトークイベントが、西脇市市民交流施設オリナスホール（同市下戸田）で開かれた。同市の歯科医で、日米野球の交流に尽力した故今里純氏に関する本「ベースボールと野球を繋いだ男～今里純　知られざる戦後日米野球交流の物語～」の出版を記念した催し。村上さんは大リーグ当時の体験を振り返りながら、来場した野球少年らに助言したり、一緒に記念写真に納まったりして交流した。（金井恒幸）

元南海選手で日本人初の大リーガー

村上さん 体験を回顧

「苦しいこと乗り越え上手に」

西脇

村上さんは1964年から65年にかけ、ジャイアンツで投手として活躍し、後に続く日本人大リーガーの礎となった。トークイベントではジャイアンツのユニホーム姿で登場。小学校時代に初めてグラブを買ってもらったうれしさや、中学の時、父親に無断で野球部に入ったエピソードなどを紹介した。

南海ホークス入団の2年後に渡米し、通訳はいなかったが、選手仲間と単語で話すうちに、約半年で「1人でどこへ行っても平気になった」。20歳で大リーグデビューし、初登板では「日本の歌をハミングしながら気持ちを落ち着かせた」という。このほか、南海ホークスのチームメートで、捕手だった野村克也さんとのやりとりなども紹介した。

日米の野球を比較し、村上さんは「アメリカは野球界に貢献した人のことや歴史を教えることを大事にしている」と指摘。「日本も野球放送などを通じて、過去のすごい選手や歴史をもっと子どもらに伝えてほしい」と望んだ。

また、野球少年らに向けて「一生懸命練習し、苦しいことを乗り越えると上手な選手になる」「どんな選手も浮き沈みがある。打てなくてもくじけず、もっと練習して次は打ってやる、という気持ちを持ってほしい」などとエールを送った。

米大リーグの経験などを話す村上雅則さん＝いずれも西脇市下戸田

バットを構える村上雅則さん（右）